



積読からの脱却

大越 実

Okoshi Minoru

現在、我が家のリフォーム工事が進行中である。リフォームを機会に家の中の片づけを行ったが、本棚の奥で積読状態になっていた洋書を捨てる決心がつかなかったため、心機一転、読むこととした。これらの洋書の中には、積読期間が数十年を超えた本もあり、よくぞ、捨てることなく、手に置いておいたと自分でも感心してしまう。いずれの本も茶色く変色しており、かび臭いような独特のおい気を発している本もある。電車の中で読んでいると、隣に座った人に、不快な思いをさせてないかが心配になるくらいである。

英語で書かれた論文や資料を読むことは、自分自身の研究や仕事を進めるうえで必要なことでもあり、避けることができないため、四苦八苦しながらこなしてきた。しかしながら、英語の勉強を兼ねて読もうと思い、身銭を切って買った洋書については、毎回、数ページ程度は読むものの、意志の弱さゆえに、読むのを断念するのがこれまでの常であった。学習能力が低いために、購入と挫折を繰り返すうちに、積読状態になった本が十数冊ある。ちなみに、積読の表記に間違いがないかをネットで調べていたら、最近では、英語でもTsumdokuで通じるとの記事があり、洋の東西を問わず、人は同じ悩みを抱えているようである。

捨てる決心がつかない割には、これらの洋書をいつどのような気持ちで購入したかはほとんど思い出すことができない。映画の原作本や映画のノベライズ本が多数あることから、映画を見て面白いと思って、また、映画を見てストーリーが分かっているので、比較的読みやすいであろうと浅はかに考えて購入したものと思われる。

積読状態からの脱却を目指し、まずは、映画を何回か見ている、マイケル・クライトンの“Jurassic Park”から読み始めた。ところが、映画のシーンを思い浮かべながら読み始めると、設定やストーリーが映画と違っており、スピルバーグ監督が原作をエンターテインメント映画としてよく仕上げているなという一方、原作は生命倫理などに焦点を当てた哲学的内容となっており、映画だけを見て、原作

を読んだような気になってはいけなさと改めて自覚した次第である。

一方、映画のノベライズ本は、映画の各シーンがほぼ忠実に文章化されていることもあり、映画のジャンルさえ選べば、初心者にも読みやすいと思われる。軍事的な専門用語が頻出する“Top Gun”（今年新作が公開されるそうです。）は読みにくかったが、“Back to the Future”は、映画では見逃してしまいそうな、続編につながる伏線も文章化されているので、理解がしやすく、続編のシーンを思い出しながら、楽しく読むことができた。

自分にとって映画関連以外の本で比較的読みやすかった本としては、マイケル・クライトンの“State of Fear”が挙げられる。本書は、地球温暖化をテーマにしたサスペンス小説であるが、科学的な事実をベースにストーリーが展開されており、改めて地球温暖化について考える機会となった。作者は、地球温暖化について懐疑的な立場であり、小説内でのデータの引用が不適切であるとの指摘があるようではあるが、科学的な根拠に基づくことなく人々に恐怖（Fear）をあおるのではなく、データに基づいてオープンな議論をすべきという作者の主張には同感する。

翻訳本は出版されていないようであるが、サイモン・ルベいの“When Science Goes Wrong”も興味深く読むことができた。本書では、科学技術の負の側面に関する14の事例が取り挙げられている。その中でも、自分が興味を持ったのは、アメリカ国内で唯一の死亡事故を起こしたSL-1という原子炉の臨界暴走事故を扱った話である。事故の凄惨さもさることながら、推定された事故原因については、本当ですかと思ってしまう。

今のところ、積読からの脱却に向けて順調に読書が進んでいる。とはいっても、この原稿を執筆している時点で、9冊目を読んでいる途中であるし、一旦読み始めた後に、後回しにした本もあることから、とても偉そうなことは言えない。積読状態から脱却するにはもう少し時間がかかるが、いい気なもので、次に何の本を買って読もうか今から調べている。新しい洋書を買う際には、便利で安価な電子書籍に移行しようと考えているが、電子書籍でも読まずに電子機器の中に溜めていたら、積読と言うのだろうか。

（（公社）日本アイソトープ協会 専任理事）